えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑④

百鬼夜行絵巻

「付喪神」ユーモラスに

鬼太郎、目玉おやじ、ねこムスメ…。これらは水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」に登場するキャラクターだ。1967年に「ゲゲゲの鬼太郎」として週刊漫画雑誌に連載され、約60年が経過した現在でも世代を超えて根強い人気がある。また2014年ごろには妖怪ウオッチの大流行が社会現象になるなど、日本人は妖怪にひかれる国民性のようだ。

今回紹介する資料は、江戸時代後期に写されたとされる「百鬼夜行絵巻」である。本図に描かれる妖怪は河童（かっぱ）や座敷童子といったおなじみの妖怪ではなく、長い年月を経た古器物に魂が宿った「付喪神（つくもがみ）」が大部分を占めており、恐ろしい見た目ながらも、どこかユーモラスで愛嬌（あいきょう）がある姿で描かれる。

全国で約60点以上の諸本が確認されている「百鬼夜行絵巻」であるが、その源流に位置する絵巻は、京都の大徳寺塔頭（たっちゅう）である真珠庵が所蔵するものとされており、重要文化財に指定されている。

本図も真珠庵本と同様の絵柄で描かれている妖怪が多く、その影響は明らかである。本資料の構成は、鉾（ほこ）を持った青鬼に始まり、大きな赤鬼が長持を壊している場面に移り、その長持から付喪神が次々に出てくる。鍋や釜、すり鉢などの台所道具から琵琶や琴、鼓といった楽器、ほうきやたらい、桶（おけ）などの日用品まで、昔の生活で使われていた道具が中心となり、最後には太陽とも仏力の炎とも言われる大きな赤い球体が描かれ、この球体から追い立てられる妖怪の姿も確認される。

本資料には詞書（ことばがき）が付けられておらず、何をモチーフに描かれているか分からない妖怪もいるが、「あの妖怪はこの道具に見えるね」と考えたり、話したりしながら鑑賞しても楽しい。

現在、本資料は当館で開催中の特別展「絵本作家たかいよしかずのハッピーワールド」で全場面を展示している。たかい先生の「ようかいむらのふしぎとしょかん」（国土社、2022年）という絵本作品には、百鬼夜行絵巻をもとにした妖怪が練り歩く場面があり、その原画を展示中。また、たかい先生が描くかわいい妖怪キャラクターが行列して歩く「百鬼夜行」の掛け軸も展示されているので、新旧の妖怪キャラの多彩な姿をお楽しみいただきたい。

なお、本資料は当館ホームページ上の「絵図・絵巻デジタルアーカイブ」により、全場面をデジタル画像で閲覧可能。

（学芸員・横井蒼大）

〈随時掲載します〉



ほうきや草履、たらいの妖怪が描かれている（36・5×107・5㌢、江戸時代後期写＝県歴史文化博物館蔵）

掲載許可番号：d20230301-04